伴侶

岩橋邦枝

新潮社

伴侶

岩橋邦枝

新潮社版

伴侶

昭和六十年四月二十日発行
昭和六十年十月十五日八刷

著者　岩橋邦枝
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一番地
電話　東京(266)五一一一(業務)
　　東京(266)五四一一(編集)
振替　東京四一八〇八　〒一六二

印刷　株式会社三秀舎
製本　植木製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価一〇〇〇円

© Kunie Iwahashi, Printed in Japan, 1985

ISBN4—10—357201—9　C0093

目次

伴侣 5
登音 53
浮巢 93
短日 141

装画　沼野正子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伴

侶

伴

侣

入院の手続きが済むと、彼女は喫煙所へたち寄ろうとする夫を急きたててエレベーターに乗った。前日の電話で、午前十時までに三階の六病棟へかならず来るよう指示をうけていた。夫は、入院をしぶって、前日から不機嫌だった。彼女が急に病人あつかいするのをうるさがり、その朝病院までハイヤーを頼むことも拒んだ。億劫げなのろのろした動作や歩き方も、体具合がわるいというだけでなく子供じみた抵抗のように彼女には感じられてきて、日頃のそっけない調子にかえって夫を急きたてた。

地階からゆっくり昇ってきたエレベーターは、ほかにだれも乗り合わせなかった。薄緑の塗装の色の古びた、開閉のおそい扉が、外来患者で混み合う一階のざわついた空気を遮断すると、暑さもいくぶん遠のく心地だった。彼女は、両手に提げた旅行鞄と紙袋の荷物をスリッパの足もとへ下ろし、汗を拭いた。

「この病院、冷房がないのね。知らなかったわ」

「だから、なにも慌てて入ることはないんだ。家でやすんでいるほうがましだよ」

「病室にはクーラーぐらいついてるでしょうよ。ここは小ぢんまりした病院で、いいわ。国立病院って、もっと堅くるしいのかと思ったけれど、さっきの窓口でも親切だし」と彼女は言った。

その気がるそうな口ぶりは、夫の不服をなだめようとするのでなくただ躱すためのおざなりなものだった。

三階について、六病棟の掲示と矢じるしのついた廊下へ入りかけると、光線のにぶい廊下の前方を歩いていた看護婦が二人の小声のやりとりを聞きつけたらしくふり返り、笑顔で寄ってきて入室の手順を教えた。そして、夫を促し、看護婦詰所へ案内していった。

彼女は、廊下の入口に立ちどまったまま待っていた。夫の姿勢のわるい歩き方が、後ろから見ると目立った。髪にふえたしらがが後頭部に一と房かたまって、粉をふきつけたように見えた。看護婦のまっすぐに首をおこしたおかっぱ風のつややかな頭髪には、小さい白帽子がずり落ちそうな位置にとまっていた。半袖の白衣が発育のよい体の丸みをぴったりつつんだ若い女と並んだ夫の後ろ姿は、貧相にしぼんだ印象で彼女の目をひいた。紺のポロシャツからつき出た腕が、看護婦の腕のとなりでくろく干からびた感じだった。肘の関節の部分だけコブのように、やや異様にとび出していた。元から肉づきの薄い中背の夫の体格がたしかに以前より骨張って、猫背の肩のあたりが削げたようになっているのを彼女は認めた。入院が決まって、よかったと思った。たとえ半月間でも禁酒と規則正しい食事を強いられる生活は、夫の体力恢復に効くにちがいなかった。

看護婦が、足の遅れがちな夫のほうへ顔を向けて何か言ってから、先にたって廊下を進んでいき「記録室」という札のさがった部屋の中へ姿を消した。そこが看護婦詰所らしく、他の看護婦たちも忙しげに頻繁に出入りしていた。廊下でいきあう患者の一人一人へ、うちとけた言葉をか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けながら器具を運んでいく看護婦もいた。浴衣の裾のはだけた男、廊下の壁の手摺りにつかまった老婆、ネグリジェの胸に魔法瓶を抱えた女や片腕に繃帯をした男が歩いていた。寝衣姿の彼らと見較べると、夫はそれほど不健康な感じでもなくむしろ場ちがいな、外の生活者の活気を夏の軽装に漂わせていた。しかし、あの歩き方はやっぱり普通ではない……彼女は、廊下の中ほどの部屋まで行くにも連れの看護婦と間隔のひらいた夫を見やりながら、娘と三人で外出した日のことを思いだした。休日の常でその日も夫は宿酔いぎみで昼過ぎまで寝ていたが、延び延びになっていた娘の高校入学祝いの買物と聞き、珍しくいっしょに出かける気をおこしたのだった。

街はゴールデンウィークの人出で混雑していた。家族とはぐれた男の子が、警官に手をひかれて泣きさけんでいる光景も見かけた。新宿の長い地下道を、ぞろぞろと切れめなく続く通行人に混って彼女と娘が喋りながらデパートへ向かう途中、夫と離ればなれになった。二人で周囲を探してみたが、見あたらない。デパートへ通じる連絡口でおち合えると思ったが、心配してもう一度首をめぐらせた娘の花江が「あ、あそこに」と彼女へ教えて、立ちどまった。通行人の群れを距てて五十メートルほど後方に、夫の姿があった。彼は、手で合図をおくった娘へ、わかっているという顔つきをつくってみせた。だが、人の流れにさからって後ろ向きにつっ立っている二人のところへ、急いで追いつこうとするふうもなく、時どき懶げなしぐさで前髪をかきあげながら歩いてきた。眼鏡の奥の目が陰気くさく彼女を見返した。

「無理して、つき合ってくれなくてもよかったのに。うんざりするにきまってるもの、こっちま

で不愉快になる」
彼女はいつもの癖で、夫へ抱く文句がましい気持を娘に向かって洩らした。人びとにはさまれて見えかくれする夫は、少しガニ股の恰好になってズボンの膝を曲げたまま交互にうごかしていた。不活発な足どりが、腰まで浸った水の中を進むように重たそうだった。「厭ね、おじいさんみたい」と、彼女はまた傍らの娘に呟いた。ようやく追いついた夫と並んで歩きだしながら
「どうしたの。どこかへ寄っていたの」と、わざと訊ねた。彼は無言で前を向いていた。
「ほら、お父さん、わたしが言っていたブラウス、ああいう色よ」と花江が、地下道の壁面に嵌めこまれた飾り窓を指さして、話を買物のことへそらせた。
その休日のあと、つれだって外出する機会もないまま彼女は、夫の歩く速度に改めて注意をはらいもせずすごしてきた。彼の不恰好な足のはこびには、思いあたる理由があった。だがそれに関して何か言うたびに、恥辱をうけたような態度で夫がつっぱねるのを知って、もう口に出さなくなっていた。彼は、やっと病院で診せると決めた、というより勤め先の上司の配慮に従わざるを得なくなったときも、睾丸の腫れを隠して内科に紹介してもらったが、初診ですぐ泌尿器科へまわされた。入院をしぶる気持には、そのことがかなり作用していた。彼女も口止めされて、腎臓の検査で泌尿器科に入院するというふうに娘へ話し、夫の妹に電話で知らせるさいも酒と過労だけ挙げて説明をごまかした。夫は、子供の頃から歯科医以外の医者にかかったことがなかった。初診を受けた内科医長から病歴を問われ、幼時のハシカと百日咳しか思いつかず肩身のせまいよ

うな気がした、という夫の言種も彼女は電話口で義妹の由子につたえて二人で笑い合った。

六病棟の入口に佇んでいる彼女の頭上に、泌尿器科と皮膚科の掲示板が吊るしてあった。どちらにしても、夫を気後れさせる病棟であることに変りなさそうだった。奥へのびた廊下の両側には、「記録室」の名称をもつ看護婦詰所とその向いの給湯室や洗面所や手洗いを中ほどにはさんで、扉を半開きにした病室が並んでいた。部屋数十二、三の病棟だった。廊下のつき当たりの窓は閉めきられ、遠目にもよごれのひどいくもった硝子が外光をしろっぽくうつしていた。病室や共同の場所の明るい光線が、扉口を通って廊下にとどいていた。室内から流れ出る空気が冷房の効いたものかどうなのか、彼女はちょっと気がかりになった。扉を閉めないでおくのは、この病棟のきまりかしら、とも思った。

夫の入る病室は、六〇一号室だった。

彼女が立っている位置のすぐ右ての、廊下のとっつきの部屋を手ぶりで教えながら看護婦詰所から引返してくる夫のようすは、普段と変りなくむぞうさで、後ろ姿の半病人のような印象を遠ざけた。

「医者の回診が、さっき終ったらしい。俺、いなくてよかったよ」と、彼は不機嫌のゆるんだ表情をみせながらも、まだ後込みしていた。

二人は、内側へ半ば開いた扉から六〇一号室へ入っていった。そこは六人の相部屋で、左側の列のいちばん手前のベッドが一つだけ空いていた。頭部の鉄枠に夫の名札がつけてあった。隣り

に、老人がバスタオルを寝巻の腹の上にかけて仰臥し、その向うの窓際のベッドで、ヘッドホーンをつけた若い男が起上り団扇をつかっていた。その青年を除いて、同室のあとの四人はいずれも六十以上の年恰好だった。彼らは、扉口で遠慮がちに挨拶した二人のほうへいっせいに視線を向けた。枕の上から頷き返す男もいた。だが、すぐにまたそれぞれの姿勢や会話へ戻って、新入りの患者に関心をとどめなかった。

つよい日射しへ向けて窓を開け放った部屋の中は、古びて天井も低いわりに明るかったが、敷布の上で細い脛を立てたり胸をはだけたりした寝姿をさらしている老人たちのようすが、人の心を滅入らせるような空気を室内につくっていた。窓は、戸外の暑気を通すために開けられているようなものだった。クリーム色のペンキの光沢の褪せた部屋の両側の壁には、枕元から手の届く高さに粗末な板が一枚とりつけられ、ボストンバッグ、衣類のはみ出た紙袋、風呂敷包み、洗面用具など各人の持ち物が並べてあった。仕切りのカーテンを絞ったレールに、タオルや手拭きを干した衣紋掛けがぶら下っていた。夏の午前の明るみにうきあがったそれらの光景は、花も装飾品も見あたらない室内を、殺風景という以上に避難所か簡易宿舎を連想させる趣きにしていた。窓際の青年だけが、枕頭台に朱色の小型テレビを据え、壁の棚の上にはラジオカセットと雑誌のほか何も置いていなかった。

彼女が、持参した旅行鞄を開ける傍らで、夫は同室の患者たちに背中を向けてベッドに腰掛け、暑そうにつき出した顔をハンカチでこすっていた。団扇が要るわね、と彼女は言いかけた。しか

し夫の気持をひきたてようもない病室の有様に触れる言葉は出しにくく、無言のまま着替えのパジャマを手渡した。廊下に面した壁とベッドとの間のせまい床で、夫の足元に屈んで入院支度の衣類や身の廻り品をとり出していると、膝の裏側まで汗ばんできてスカートの裾がまつわりついた。暑いさかりに、夫はここで当分の間暮すのか、と彼女は思った。夫の性格からみて、六人の相部屋というだけでも苦痛な毎日となるにちがいなかった。

彼女はしかし、暗い面もちで黙りこんでいる夫へ素直に心が寄っていかないのを意識した。鬱陶しいというふうに感じ、何か手伝ってほしいいらだちもおぼえながら、ズボンの足が邪魔していよいよ窮屈なむし暑い床の上で荷物をといていった。団扇のほか、バケツと雑巾もさっそく必要だとわかった。しかたなく新品の浴用タオルを廊下の先の洗面所で絞ってきて、雑巾におろした。枕頭台の上と抽斗(ひきだし)を拭き、抽斗の下の扉を開けると、前の患者ののこしていった罐切りがスチールの棚にころがっていた。

「着替えをしまっておく場所がないわね」

「ちょっと煙草を喫ってくる」と夫が別のことを言い返し、視線をよそへ放ったまま、ベッドのへりに掛けていた腰をうかせた。

「パジャマ、着ないの」

「あとで、いい」

「はやく戻ってきてね。わたし、ここが済んだら帰りますよ」彼女は、同室の人たちを憚って抑

えた声に意地悪げな調子をひびかせた。

夫が扉口へさしかかったとき、頃合いをはかったように天井のスピーカーが彼の氏名を二回繰返し、外来診察室の主治医のところへすぐ行くことを指図した。棒読みのような口調の看護婦の声だった。彼は足をとめて聞き終ると、彼女のほうへちらと落着かない目つきをかえしてから出ていった。室内では老人同士のとりとめない雑談が続いていた。夫のベッドの隣りの患者は、くぼんだ瞼を閉じてぐったりと仰向けに寝たままだった。禿げあがった頭皮のほうまで斑らにしみのういた、痩せこけた顔のわきに、喀痰用の金属容器がむき出しで置いてあった。

彼女は、物音をたてないようにしながら荷物の整理を一通り済ませると、財布とハンカチだけ握って部屋の外へ出た。

廊下の空気に触れるとほっとした。病室の窓の日射しに馴れた目に、仄ぐらくそれだけ涼しいようにうつる廊下には、相変らず忙しげな看護婦の行き来や、体をかばってそろそろとうごいている患者の姿があった。彼女は、さきほどタオルを手にして往復するさい注意をひかれた洗面所の向いの病室のところまで、もう一度歩いていった。それは一枚きりの表札から個室とわかる病室で、看護婦詰所の手前にふた部屋続いていた。半開きのスチール製の扉が並んでいるなかで、そこのふた部屋だけは木材の扉を閉ざし、室内に冷房装置があるらしいことを示していた。片方の扉には、「面会謝絶」のプレートが把手に提げてあった。壁の名札を見ると、どちらも泌尿器科の男の患者だった。彼女は、廊下の両側の病室を見渡した。その二室のほかはすべて金属製の扉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com